

氏 名 長谷川 典子

学位（専攻分野） 博士（学術）

学位記番号 総研大甲第 1185 号

学位授与の日付 平成 20 年 9 月 30 日

学位授与の要件 文化科学研究科 メディア社会文化専攻
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 韓国テレビドラマの感情移入的視聴による偏見逓減効果

論文審査委員	主査	教授	山田 恒夫
		教授	小林 登志生
		教授	三輪 眞木子
		准教授	高橋 秀明
		教授	石田 佐恵子(大阪市立大学)
		教授	内藤 哲雄(信州大学)

論文内容の要旨

本論文は、韓国テレビドラマ『冬のソナタ』の視聴が、韓国・韓国人に対するイメージの向上や偏見の逡減をもたらす過程を、視聴者の心理的変化とドラマへの「感情移入的視聴」に焦点を当てて明らかにした実証研究である。本論文テーマに着目した動機は、『冬のソナタ』を視聴した周囲の人々の態度変容、およびインターネット掲示板の内容分析結果（長谷川 2004）から、『冬のソナタ』視聴が韓国・韓国人に対する偏見逡減の要因である可能性が示唆されたことによる。本論文では「登場人物の立場に立って物を見、また登場人物の気持や感情に情緒的に反応しながら視聴すること」を「感情移入的視聴」とし、偏見の逡減を、「否定的態度や信念、感情が減少し、肯定的態度や信念、感情が増加したことが認められた場合」と定義している。本論文では、『冬のソナタ』視聴における「感情移入」がいかなる心理的変化を生んだのかを、質問紙調査および個人別態度構造（PAC：Personal Attitude Construct）分析法による面接調査を組み合わせた混合研究手法を用いて分析した。PAC 分析法の経時的使用により、視聴者の心理変容過程における肯定的なコアイメージの保持と否定的なイメージの消失を明らかにした。さらに、分析結果をもとに韓国ドラマを中心とした異文化メディア視聴による偏見逡減効果の理論的説明を試み、それを新たな偏見逡減モデルとして提示した。

第 1 章では、著者の個人的体験からの関心を踏まえ、『冬のソナタ』に着目した理由と本論文テーマに取り組んだ背景および研究の目的・意義について述べている。第 2 章では、従来のテレビ研究ではイメージ形成や変容をもたらす効果については多様な研究がなされたが、偏見のような「信念・価値レベル」への影響については効果があまりないとされてきたこと、主として否定的ステレオタイプや偏見の流布や助長といった否定的な側面のみが目が向けられ、本研究のように対象国のイメージの改善や偏見の逡減など肯定的な側面に焦点を当てた研究は比較的軽視されてきたこと、さまざまな立場のテレビドラマ研究においても、ドラマに描かれた対象国の印象形成にかかわる要因の解明についてはほとんど取り扱われていないこと、などの点を指摘し、本研究の学術的意義および新規性が論述されている。第 3 章では、方法論の検討を行い、質問紙調査法および内容分析法について解説するとともに、PAC 分析法の採用理由を述べ、混合研究法における量的・質的方法とそれぞれの問題点や限界についても指摘した。

本論文の中核は、第 4 章から第 7 章の調査研究である。第 4 章では、韓国テレビドラマ『冬のソナタ』の視聴者を対象に質問紙調査を実施し、ドラマ視聴による調査協力者の韓国・韓国人に対する意識変化のあり方について量的・質的な分析を行った。分析の結果「感情移入的視聴」により韓国・韓国人に対する関心度が増加し、イメージが肯定的に変容するという変化が生じたことを確認した。第 5 章では、韓国・韓国人に対する偏見の逡減に関わる要因として「感情移入的視聴」に加えて、インターネット利用頻度など諸要因の影響を質問紙調査により分析した。「韓国に対する偏見の逡減」、「日韓の歴史への興味喚起」、「韓国イメージの改善」を従属変数とする 3 種類のステップワイズ法による重回帰分析により、韓国ドラマの「感情移入的視聴」は、韓国に対する偏見の逡減、韓国イメージの改善、日韓の歴史への興味喚起などを生起する要因となっていることが確認された。第 6 章では、質問紙調査の限界を克服すべく、個人の深層心理に深く切り込むことができる PAC

分析法を用いた面接調査によって、『冬のソナタ』視聴者に生じた韓国・韓国人に対するイメージ、否定的ステレオタイプ、偏見などの心的変容について詳細に検討した。その結果、韓国ドラマの「感情移入的視聴」は、韓国・韓国人に対する否定的ステレオタイプや偏見の逡減を導く効果があることが示唆された。第7章では、第6章の面接調査協力者の半数を対象に、同じPAC分析法により2年後再調査を実施した。その結果、『冬のソナタ』の「感情移入的視聴」により形成された肯定的なコアイメージが2年間保持されたと同時に、否定的イメージが逡減あるいは消失されたことが確認された。すなわち、韓国ドラマの「感情移入的視聴」には、韓国・韓国人に対する偏見減少の持続効果もあることが明らかになった。

最終章では、第4章から第7章の調査結果にもとづき、異文化テレビドラマの「感情移入的視聴」による偏見逡減効果を理論的に説明する新たな偏見逡減モデルを提示した。

論文の審査結果の要旨

本論文は、韓国テレビドラマ『冬のソナタ』の視聴が、韓国・韓国人に対するイメージの向上や偏見の逡減をもたらす過程を、視聴者の心理的变化とドラマへの「感情移入的視聴」に焦点を当てて明らかにした実証研究である。本論文テーマに着目した動機は、『冬のソナタ』を視聴した周囲の人々の態度変容、およびインターネット掲示板の内容分析結果(長谷川 2004)から、『冬のソナタ』視聴が韓国・韓国人に対する偏見逡減の要因である可能性が示唆されたことによる。本論文では「登場人物の立場に立って物を見、また登場人物の気持や感情に情緒的に反応しながら視聴すること」を「感情移入的視聴」とし、偏見の逡減を、「否定的態度や信念、感情が減少し、肯定的態度や信念、感情が増加したことが認められた場合」と定義している。出願者は、『冬のソナタ』視聴における「感情移入」がいかなる心理的变化を生んだのかを、質問紙調査および個人別態度構造(PAC: Personal Attitude Construct)分析法による面接調査を組み合わせた混合研究手法を用いて分析した。PAC 分析法の経時的使用により、視聴者の心理変容過程における肯定的なコアイメージの保持と否定的なイメージの消失を明らかにした。さらに、分析結果をもとに韓国ドラマを中心とした異文化メディア視聴による偏見逡減効果の理論的説明を試み、それを新たな偏見逡減モデルとして提示した。

第1章では、出願者自身の個人的体験からの関心を踏まえ、『冬のソナタ』に着目した理由と本論文テーマに取り組んだ背景および研究の目的・意義について述べている。第2章では、従来のテレビ研究ではイメージ形成や変容をもたらす効果については多様な研究がなされたが、偏見のような「信念・価値レベル」への影響については効果があまりないとされてきたこと、主として否定的ステレオタイプや偏見の流布や助長といった否定的な側面のみに目が向けられ、本研究のように対象国のイメージの改善や偏見の逡減など肯定的な側面に焦点を当てた研究は比較的軽視されてきたこと、さまざまな立場のテレビドラマ研究においても、ドラマに描かれた対象国の印象形成にかかわる要因の解明についてはほとんど取り扱われていないこと、などの点を指摘し、本研究の学術的意義および新規性が論述されている。第3章では、方法論の検討を行い、質問紙調査および内容分析法について解説するとともに、PAC 分析法の採用理由を述べ、混合研究法における量的・質的方法とそれぞれの問題点や限界についても指摘した。

本論文の中核は、第4章から第7章の調査研究である。第4章では、韓国テレビドラマ『冬のソナタ』の視聴者を対象に質問紙調査を実施し、ドラマ視聴による調査協力者の韓国・韓国人に対する意識変化のあり方について量的・質的な分析を行った。因子分析、自由記述の内容分析の結果、「感情移入的視聴」により韓国・韓国人に対する関心度が増加し、イメージが肯定的に変容するという変化が生じたことを確認した。第5章では、韓国・韓国人に対する偏見の逡減に関わる要因として「感情移入的視聴」に加えて、インターネット利用頻度など諸要因の影響を質問紙調査により分析した。「韓国に対する偏見の逡減」、「日韓の歴史への興味喚起」、「韓国イメージの改善」を従属変数とする3種類のステップワイズ法による重回帰分析により、韓国ドラマの「感情移入的視聴」は、韓国に対する偏見の逡減、韓国イメージの改善、日韓の歴史への興味喚起などを生起する要因となっていることが確認された。第6章では、質問紙調査の限界を克服すべく、個人の深層心理に深く切り込むことができるPAC分析法を用いた面接調査によって、『冬のソナタ』視聴者に生起した韓国・韓国人に対するイメージ、否定的ステレオタイプ、偏見などの心的変容について詳細に検討した。その結果、韓国ドラマの「感情移入的視聴」は、韓国・韓国人に対する否定的ステレオタイプや偏見の逡減を導く効果があることが示唆された。第7章では、第6章の面接調査協力者の半数を対象に、同じPAC分析法により2年後再調査を実施した。

その結果、『冬のソナタ』の「感情移入的視聴」により形成された肯定的なコアイメージが2年間保持されたと同時に、否定的イメージが逡減あるいは消失されたことが確認された。すなわち、韓国ドラマの「感情移入的視聴」には、韓国・韓国人に対する偏見減少の持続効果もあることが明らかになった。最終章では、第4章から第7章の調査結果にもとづき、異文化テレビドラマの「感情移入的視聴」による偏見逡減効果を理論的に説明する新たな偏見逡減モデルを提示した。

以下に本論文の学術的意義および特筆すべき点について述べる。

- ① 本論文は、社会科学で広範囲に利用されている質問紙調査法に加えて、日本で近年開発された質的調査と量的調査の両研究手法を兼ね備えている PAC 分析法を使用している。PAC 分析法の採用により質問紙調査結果で示唆された異文化テレビドラマの「感情移入的視聴」による偏見逡減効果について、視聴者個人の文脈に沿ったイメージの質的変容の側面を明らかにしている。とりわけ経時的研究において PAC 分析法を使用することによって、肯定的なコアイメージの保持と否定的なイメージの消失を明らかにした点は注目に値する。
- ② 偏見に関する研究が積み重ねられている社会心理学、異文化コミュニケーション学においては、偏見を逡減するためには、直接的な接触に勝るものはないとの報告が多かった。それに対し本論文は、ドラマのようなメディアとの接触が相手文化やそこに暮らす人々に対する偏見を逡減させるという研究課題に取り組んでおり、メディアを通じた異文化コミュニケーションに関する研究に新たな視点を提示するものである。
- ③ 本論文では、テレビドラマである『冬のソナタ』の「感情移入的視聴」が韓国文化に対するイメージを変更したことから、異文化テレビドラマの「感情移入的視聴」が、視聴者の対象文化に対するイメージを変更する可能性を示した。その意味で、本論文は、きわめて重要な視点を提供した。
- ④ 近年、日本で短期間に生じた韓流ブームに代表される大規模な流行現象とされる異文化メディアの受容とその波及効果については研究例が希少である。その一例である『冬のソナタ』が日本に住む人々の心理に引き起こした多様な変化を実証的に捉えた本論文は、異文化交流史的観点からも貴重な研究成果である。

なお、本論文の調査結果に基づき提示された偏見逡減モデルは、対象とした調査協力者の属性や題材として取り上げたテレビドラマが限られているため広汎な適用は現段階では限界がある。今後の課題としてさまざまな属性の調査協力者およびその他の題材について調査を行い偏見逡減モデルの適用範囲を拡張することが望まれる。

本論文の骨子となっている各章で論じた内容の基となっている5本の原著論文は、4つの国内外の学会（異文化コミュニケーション学会、多文化関係学会、異文化間教育学会、およびInternational Association for Intercultural Studies）の論文誌に掲載されたものである。

以上の成果に基づいて、本論文は博士論文としての学術的水準に達していると判断した。